

ウォーキングは私にとつて唯一の日課だ。ゴールデンウイークのあいだは、釜山にも多くの日本人観光客が訪れる。だから部屋に閉じこもる日がつづいた。それが過ぎ、観光客の数が一段落したのを見はからつて、体を動かそうと思いたつた。

韓国にきてからひと月が過ぎた。海雲台のビーチに面したコンドミニアムのバスルームには大きな鏡がはめこまれている。シャワーのたびに映る私の体は、日本にいたときより確実に二キロ近く肉がついている。

日本を離れたとき、私の体重はたぶん四キロは落ちていたろうから、あわせれば六キロ太つたことになる。

釜山へは、福岡からヘリできた。韓国人の朴と、そのボディガードらしい金という無口な男といつしよだった。

朴は釜山の大家で、福岡の暴力団、要道会の菅原と組んで、地獄島の支配権を手に入れようとしている。百年以上つづいてきた地獄島のしきたりが崩れ、中国人が入りこんでいた今は、確かに狙い目のだろう。

熊本県の南西、八代海^{やしろが}に百以上浮かぶ天草諸島のひとつ浪越島^{なみのしじま}が、通称地獄島と呼ばれる売春島だ。私は祖母の手で、十四のときにそこに売られ、何千人という客の相手をさせられた。二十四でその島から脱出したが、それが百年以上の島の歴史でただ一度だけ成功したといわれている「地獄抜け」だ。

実際には、「地獄抜け」に成功した女は他にもいたかもしれない。だが、「地獄抜け」から何年たとうと、島はそれを許さない。

島には「番人」と呼ばれる人の心をもたない男たちがいて、「地獄抜け」をした女の居場所がわかるや、連れ戻しにくる。たとえ連れ帰っても飯炊きの役にしかたないような老婆になっていたとしても、だ。

それが掟^{おきて}なのだ。

だから「地獄抜け」に成功した女は、自分がそうであると決して口にしない。いつ、どこから番人が現われて、地獄の日々へと連れ戻されるかわからないからだ。

頬紅とアイシャドウを濃い目に塗り、髪をまとめてうしろで留めた私は、スポーツウェアの上を着け、紫外線よけの大きなつばのついたサンバイザーをま深にかぶって、海雲台ビーチの遊歩道を早足で歩いていた。全長二キロの白い海岸線の二往復を、この十日ほどつづけている。

歩くときは大股で背すじをまっすぐに立てる。化粧を濃くしているのも、大股で歩くのも、見た目を韓国人に似せるためだ。もちろん話しかけられればすぐにバレるのだが、私が韓国人に思われたいのは、日本人に対してだ。日本語に反応さえしなければ問題はない。

「地獄抜け」から十二年、私はそれなりに平和を手に入れていた。ある種のコンサルタントのような仕事をし、それで作った実社会とのつながりからいくつかの事業に投資して、まずまずの収

入を得ていた。もちろん島のことは、誰にも話さなかった。

地獄島と日本の裏社会には密接な関係があり、それが百年間、あらゆる組織暴力の干渉をうけず、自治に成功してきた理由だった。

島の中心部の高台に、まっ黒に塗られた烏居があった。九凱^{くがい}神社の烏居だ。

九凱神社は、神社本庁の統轄下にはない単立神社で、神主は代々島主^{しまぬし}がつとめている。そして、七大組織と呼ばれる日本の広域暴力団には、本家と直系が組長を交代するとき、その襲名披露に九凱神社からの「使者」を列席させなければ正式なもの見なされないと見なされ、という因習がある。そのため地獄島を一組織が支配するのは許されなかった。

だが七大組織の勢力にもばらつきが生じ、何よりその古めかしい因習を馬鹿ばかしく感じる若いやくざも増え始めた。

一方で地獄島もかつてのような栄華を失った。貧困のために「身売り」するような日本人の女は減り、島は中国マフィアと組まざるをえなくなった。

中国人の女が大挙して島に流れこむと、それとともに中国人の男もやってくる。結果、三人いた番人のうちのひとりには中国人がつとめるというありさまだった。

私がそうした事情を知ったのは、十二年ぶりに島を訪れたときだ。

島を訪れた理由は、帰るためではなく、二度と過去に追われなくなかったからだ。

考えてみれば、あるとき私が島に渡らなくとも、番人に追われる心配は消えていた。二人いた日本人の番人を私は東京で殺していた。残った中国人の「三番」が、私を追って東京までやってくることはなかったらう。

だが私は、島がそこまで「衰えている」とは知らなかった。最初に私を追ってきた「一番」は、

関東の大組織の連絡会議である一木会の世話人を殺し、結果、一木会最大の組織、連合は、私を島に売り渡すことを最高幹部会で決定していた。

私は十二年で築いた仕事と生活のすべてを失った。その上、島に追われつづける羽目になったのだ。それから逃れるためには、島に戻り、直接話をつける。以外に道がなかった。同行したのは、ただひとりの友人で元警官の星川と、星川が福岡で見つけた協力者、朴と菅原、そして金だった。

朴と菅原の目的が島の支配権にあると知ったのはそのときだ。福岡の要道会は七大組織に属しておらず、韓国人が中国人に代われれば、大きな利権を見こめると考えていた。

朴の指示で、金は島主と島最大の勢力を誇った「袖屋」の名主を殺し、九凱神社を爆破した。九凱神社そのものが消え、神主である島主が死んだとなれば、七大組織もどうしようもない。その手があると朴に密かに教えたのは、連合のニューウェーブといわれている若手臺頭株の東山というやくざだった。

東山は連合のトップである最高幹部会の古くさい考え方に不満を抱いていて、釜山で知り合った朴に、地獄島の乗っ取りをそそのかしていた。

朴と私の目的は、結果として一致した。長い島の歴史はかわった。島主も使者も番人も消えた。やくざからも警察からも不可侵であった島に、警察が入ったことを、私は釜山にきてから衛星テレビのニュースで知った。

殺人と爆破の主犯として手配されたのは私だ。これも朴の計画通りだった。かわりに私は、「林英美」という新しい名前を与えられ、海雲台ビーチに面した高層コンドミニアムの一室で暮らしている。

島から中国人は一掃された。いったんがたがたになった島のシステムを再構築するのは九州要道会の仕事だ。そこへ朴が韓国から女を送りこむ。東京よりはるかに韓国に近い地獄島なら、日本人だけでなく韓国人の客も見こめる。

私はそこでの管理業務、平たくいえば女将をやらないかと打診されていた。今はまだキナ臭い匂いも残っているが、あと半年もすれば、警察もマスコミも関心を失う。そうなったら、韓国人として日本に戻り、店を経営しないかというのだ。新規採用する女の子の面接や驥、さらにはサービスの指導もやってほしい。何年か働いて金をためれば、東京に復帰するのも夢ではない、と朴は語った。

確かにそうかもしれない。だがたとえ客をとる身でなくなったとしても、私は二度とあの島で暮らしたくない。いつでも好きなときにでていける、誰からも監視も折檻もされない、そうわかっていても、あの島での生活を想像するだけで吐きけがこみあげる。

かといって、今の私に韓国でできることは何もない。

私のいるコンドミニアムは、朴のもちものだ。この先一生、ここに住めるわけでもない。コンドミニアムの広さは百二十平米もあり、買えば日本円で七、八千万円はするらしい。オーナーの多くは、ソウルや釜山の金持で、あとは在日韓国人の成功者などだ。

ひと月のあいだで簡単な言葉とハングルの読み方は覚えたが、とうてい仕事を始められるレベルではなかった。それに朴を除けば、私はこの国の誰ともコネクションがない。

私の身の周りの世話を焼いているのは、ホとチェという、二人の若い韓国やくざだ。二人は釜山を縄張りにする派「新世紀」に属しており、朴は「新世紀」の会長のビジネスパートナーなのだ。ハングルしか習っていない二人は、自分の姓を漢字で書くことができない。

韓国の組織暴力は、完全に地域密着型で縄張り意識が非常に強い。日本のような、全土に傘下団体をもつ大組織は存在しない。

シノギの多くは、日本のやくざとかわらない、みかじめや女だが、ひとつだけ大きく日本と異なるものがある。

パチンコ屋で景品として発給される商品券の買い取りだ。政府公認の商品券は、本来どこの店舗でも使える筈なのだが、実際にはまったく流通していない。それを額面の九割で買いたるのが、地元の派のシノギとなっている。その額は、韓国全土で一カ月に十八兆ウォンに達する。買った商品券は彼らがオーナーをつとめるパチンコ屋に還流する。

こうした話を私に教えてくれたのがホとチェの二人だった。二人とも三十を過ぎたばかりで、土地の言葉で「ガンペ」と侮蔑的に呼ばれるチンピラ階級を卒業したところだ。釜山では、チンピラはかつての日本人やくざのような角刈りが多く、ヘアスタイルで組織における地位がわかる。

ホもチェも、日本人やくざとは異なつてスーツなどは好まず、ラフな服装をしている。目つきもふだんは決して威嚇的ではなく、自ら「新世紀」の構成員だと名乗らなければ、やくざには見えない。ちなみに、日本のやくざと異なる点は他にもあり、代紋入りの名刺などもたず、表だつて集団で行動することもめつたにしない。裏社会の住人であると強く自覚し、それを恥じているのも日本人とはちがう。

彼ら二人は、韓国人男性にとっては義務である徴兵も受けていない。ホには二年以上の服役歴があり、それが理由で失格となり、チェは徴兵を免れるために右手の人さし指の先端を自ら切断した。右手の人さし指は、銃の引き金をひく指だ。失格の理由になる。

軍隊にいくのが恐くてやったのではない、とチェはいった。二年半の兵役のあいだに組織での

出世競争に敗れるのが恐かつたのだ。

二人とも日本語はかなり達者だ。「新世紀」は、日本の暴力団ともつきあいがある。

やくざの大物となつた在日韓国人の多くが、釜山やソウルを頻繁に訪れ、世話を焼く役目が回つてくる。その内容は、最高級の食事と最高級の女、カジノに射撃だ。

海雲台には観光客に実弾を撃たせる射撃場があり、ゴムやサイパンより近い「練習場」として、日本人やくざに人気がある。

二人は、私が彼らの会長のビジネスパートナーの友人であることに敬意を表し、どれだけ親しくなろうと、礼儀を崩すことは決してしない。そういう点では、日本人やくざよりもはるかに昔気質だった。

夏の海水浴シーズンになると、砂浜が見えないくらい人で埋まるといわれている海雲台ビーチだが、まだ早いこの時期の平日の午後は、人影もまばらだ。犬を散歩させてきている老人の姿が目につくていどだ。

国産自動車の生産が軌道に乗り、韓国では自家用車が飛躍的に普及した。その結果、どれほど短距離の移動であろうと車を使う人が増え、歩いている人間は繁華街の一角などを除けばほとんど見ない。かわりに朝晩の交通渋滞は東京を上回る。

スポーツウェアのヒップポケットに入れていた携帯電話が振動した。私はあたりを見回し、声が聞こえる範囲に人がいないのを確かめて耳にあてた。

「はー」

「林さん、ホです。今夜、食事、どうしますか。届けますか、食べにいきますか」

「食べにいくわ」

「ロシア料理、どうです」

「いいわね」

「七時、迎えにいきます」

「オーケー」

答えて電話を切った。夕食は二人のうちのどちらかが必ずつきあってくれる。どちらも都合が悪いときは、前もって弁当が届けられる。もちろんすべてが親切心からではない。二人は、私の世話を焼くと同時に監視も命じられているのだ。

初め、女や射撃では「接待」にならない私をどう遇するか、二人は困ったようだ。釜山には政府公認の外国人専用カジノが二カ所あるが、日本人観光客、特にやくざの利用者の多いカジノに私は足を踏み入れられない。別名義のパスポートをもっているとはいえ、いっどこから警察や私に「貸し」があると考えている組に伝わるかわからないからだ。

公認のカジノ以外にも、金持や韓国人やくざ向けの鉄火場があった。そこは警察のおぼろ捜査を逃れるため、一グループ八十万ウォンの入場料をとる。だがもともとギャンブル好きではない私にはそんな高い入場料を払ってまで、ポーカーや花札をやる気はない。しかも「ハウス」と呼ばれるそうした地下カジノには、在日韓国人も多く訪れる。

そこで結局、彼らは「お喋り」を私に提供する羽目になった。組うちの話をすることはさすがにないが、韓国、ことに釜山の現状や派どうしの対立、シノギの内容などを、居酒屋や海鮮料理店の個室などで、私は訊きだした。

いったいあとどれだけの期間、この釜山に隠れていなければならぬか、予想もつかず、これまでほとんど関心のなかった韓国の、特に裏社会の事情について学ぶ必要を私は感じていた。そ

れはまた言葉の学習でもあったし、生きのびるために不可欠な知識の吸収でもあった。

場合によっては年単位で、日本に戻るのが遅くなるかもしれない。要道会による地獄島の実効支配はそれほど間をおかずに可能かもしれないが、複数の殺人と爆破の容疑者とされている私はそう簡単には帰れない。

釜山にきてすぐ、私は整形手術をうけ、まぶた瞼を一重にして頬骨をけずった。抜糸はウオーキングを始める直前だったが、まだ完全に顔の印象をかえるには至っていない。しかも日本の警察は、私の指紋を握っていて、こればかりはどうしようもなかった。

私が無実であることを証明しようとすれば、要道会は私を消す。

いつてみれば私は、要道会と朴の都合で、この釜山にとめおかれているのだ。両方が私を不要と考えれば、いつ消されても不思議ではない。

私が生かされているのは、要道会に対するカードの一枚として、朴にとっておそらく価値があるからだ。地獄島における女の商売が軌道に乗るまで、朴は完全には要道会を信じられない。要道会が、かつての島主のように中国人や、別の韓国人に女の供給を依頼しないという保証はない。

韓国人の女が中国人の女より割高であることは、東京でのビジネスで私は知っていた。ただし、サービスや容姿の点で今のところ、韓国の方が上回っている。

結局のところ、女をめぐる商売は、質を求めるか値段を求めるかで二極分化していくものなのだ。いい女を抱くためならいくら払ってもかまわないと考える客と、安ければ安いほどいいと考える客と。

そしてごくまれに、安い女の群れにその割には容姿の整った女が混じっていて、「伝説」となる。男はそういう伝説を好む。

だが少し考えてみれば、そんな伝説に根拠はないか、あつてもごく限られた期間のものだとわかる筈だ。

女が体を売る理由は、金以外の何ものでもない。自分の体により高い価格がつくと知れば、売り場を移動することにためらう女はいない。すべては金のためなのだから当然だ。

したがって「鄙ひなにはまれな美女」など、ありえない。稼げる女は、より稼げる土地、より稼げる店へと移りつづけ、それによって業者もより稼ぐというシステムが完成しているのが、売春というビジネスなのだ。

万一、本当に鄙にまれな美女がいるとすれば、必ず負の理由がある。心か体のどちらかを病んでいるか、その女をそこに縛りつける男がいるか。

本来、女を働かせる以上、男も金を求めて移動させる筈なのに、縛りつけているのはその男が恐しく愚かか心を病んでいるからだ。そういう男はいつ、客でしかない、女の相手に危害を与えないとも限らない。

金がすべてを決定するというのは、貨幣価値の異なる海外で女が商売をするところからもうかえる。同じ一度の交渉で稼げる額が自国の数倍から十倍に及ぶと知れば誰でもそちらを選ぶ。さらに海外での商売は、自国での経歴には残らない。「留学」だの「語学研修」という言葉で、出稼ぎ期間をつくろえる利点がある。

その結果、容姿を第一条件にするなら、日本人より整った中国人や韓国人が日本では安価で提供される。送りこむ組織は、渡航費用の他に、宿舍費や用心棒代等の名目で、女たちからの収奪を続けられる。

また自国内ではそれなりに取締る司法機関も、国外への出稼ぎ売春に対しては寛容になるとい

う奇妙な構図がある。国境をまたぐために実態の把握が困難になると、売春もまたある種の外貨獲得の手段である、というのが主な理由だ。

韓国では、売春がつい二年ほど前まで処罰されなかったこともあり、業者が乱立していた。こうした風俗業は、法整備が進んで規制が厳しくなればなるほど、そのすきまでの商売にうまみがある。自由競争の状態では、新規参入には相応の力が求められる。

ホヤチエの話では、高級売春婦は、通称「ルーム」と呼ばれる「ルームサロン」、個室クラブに派遣されることが多く、そうした「ルーム」は五つ星クラスの高級ホテル内にもおかれている。オーナーは釜山やソウルの金持や引退した韓国やくざで、管理を派に委託する。そこではひと晩に百万円以上がつかわれることもざらにある。

一方、釜山市内の飾り窓の中で女が待機するような安い「置き屋」などは、引退した警察官が退職金がわりに期間限定で経営権を預かることもあって、「小商こあきない」といった見られかたをしている。そこにもやはり用心棒やポン引きなどのチンピラがいるが、その多くは「ガンペ」予備軍といったところだ。

ホヤチエにいわせれば派のトップと警察の上層部とでは話がついており、組織の上層部が逮捕、投獄されることはめつたにないらしい。ガンペ時代に服役するのは学校に通うようなもので、その期間が長ければ長いほど星がつく、といわれる。したがって警察に対する脅威をあまり感じていないように見える。

ビーチを二往復した私は遊歩道から海岸線を走る道路に上がり、早足で横断した。免税店や高級ホテルが並ぶ一角なのに人通りは少ない。もう少し北寄りの中洞チュド中心部には商店や露店が軒を接する繁華街がある。

マリオットホテルと道路をはさんだ向かいに、私の暮らすコンドミニウムはあった。入口は殺風景でがらんとした造りで、住居用というより、オフィス向け中層ビルのように見える。

エントランスの階段を、女がひとり降りてくる場所だった。濃いサングラスをかけ、ジーンズにフェイクレザーのジャケットを着けている。このひと月間、一度も見なかった顔だ。女は手にした手帳をのぞきこみながら、私が歩く歩道にまっすぐ降りてきた。

歩道は隣接するビルの建設工事どころどころ敷石が掘りかえされていて、実際に歩ける幅は五十センチもない。女は私に気づいておらず、大股でまっすぐに歩いてくる。雰囲気から日本人ではない、と私は見てとった。狭い歩道で女とぶつかるのを避け、私は体を斜めにした。ようやく女は私に気づいた。

顔を上げ、手帳を閉じて、私を見た。サングラスの奥の目はうかがえないが、整った容貌の持ち主だ。ただ口もとに険しさを感ぜさせる皺が刻まれていて、三十代の終わりか四十の初め頃だと思った。

「大きなショルダーバッグに手帳をしまい、

「ごめなさい」

と女はいった。発音は妙だが、日本語だ。

私は無視した。日本語で応じれば、日本人だと白状するようになるものだ。じつと汗ばんでいた背中が急速に冷たくなる。

すれちがい、エントランスの階段を登って、ガラス扉をくぐりコンドミニウムに入った。外からは目隠しになる濃い色ガラスの内側から女をふりかえった。

女は歩道に立ち止まり、こちらを見ていた。一瞬緊張したが、女の目に私の姿は映らない筈だ。

女の視線はコンドミニウムの上層部に注がれているようだ。二十八階建てのコンドミニウムには百室以上が入っている。

住人ではない、と確信していた。住人なら歩いて移動などしない。地下駐車場に止めた自家用車に乗るか、建物正面に運転手付の車を待たせている。

コールガールにしては年がいつているし、服装もそれらしくない。

私は身動きせず、女の姿を観察していた。

どこことなく、韓国人らしくない。日本人ではないだろうから、中国人かもしれない、と思った。

服装以外で日本人と韓国人、中国人を区別するのは、私にはこの釜山では難しい。ホヤチェは簡単だ、という。

日本人は顔がやさしい。韓国人は日本人よりわずかだが険しい顔をしている。それよりさらに険しいのが、出稼ぎにきている中国人たちだ。

釜山には上海路という名の中国人街がある。釜山駅のま向かいで、亀峰山へと登る坂に沿って中国料理店や両替商などが建ち並んでいる。最近はそのロシア人が入りこみ、中露混生の街と化している。

中国人の大半は船でやってくる。日本とちがって地つづきの大陸なのだが、韓国と中国のあいだには北朝鮮があるので、船を使つての移動となる。

中国人が最も多く上陸するのは、ソウル西部の仁川で、大きなチャイナタウンもある。仁川は釜山と同じ港湾都市なので、荷役事業などの職が比較的容易に見つかるのもその理由だ。韓国にやってくる中国人の多くは朝鮮族で、着いたその日から言葉が通じる利点もある。

やがて女は踵を返し、歩き去った。中洞の繁華街の方角へと向かっている。その姿に私は不安

をかきたてられた。理由はあった。女が私に日本語を使ったからだ。

このコンドミニウムに日本人がひとりもない、ということはないだろう。少なくとも在日韓国人が所有する部屋は何室かある、と聞いた。

だが女は何の迷いもなく私に対して、「ごめんなさい」と口にした。とりあえずは「ミアンミダ」、あるいは「カンサハムニダ」でもよかった筈だ。

私が日本人であることを確かめるためにいったのかもしれない。あの女が日本人であるとは思えない。発音がおかしかったし、日本人が外国人を装って使った日本語とは明らかにちがう。

私はうまく無視できたのだろうか。一瞬でも動揺した気配を悟られなかっただろうか。

だが、私が私であることを確認したい、中国人や韓国人がこの街にいるとは思えない。日本の警察から捜査協力を依頼された、こちらの婦人警官だろうか。そうした動きがあれば、朴の耳に入らない筈はなかった。もし私がこのコンドミニウムでつかまれば、当然、朴の身にも累が及ぶ。

「新世紀」も無縁ではすまない。ホやチェの言葉を信じる限り、組織の耳は地元警察に浸透している筈で、何の前触れもなく、警官が私に近づくとはいえなかった。

それに韓国警察がそこまで慎重な捜査方法をとるという話は聞いたことがないし、私自身、この数日間、監視をうけていると感じてはいなかった。

ただの偶然なのか、何かの理由であの女は私を日本人だと見抜き、日本語で詫びの言葉を口にしただけなのか。

しかしそれならそれで、整形手術を含め、韓国人に見せる私の偽装はまるでうまくいっていない、ということになる。あっさりと、それもひと目で見抜かれてしまった。

つまり、いつ追っ手につかまってもおかしくはない。

釜山に長居をしすぎたのだろうか。ソウルに移るのを考えるべきか。

だが朴は自分の影響力が小さくなるソウルに私に移るのを望まないだろう。私としてもソウルに移ったあと、何をどうすべきか、あてはない。

不安は、部屋に上がりシャワーを浴びても消えなかった。

水営湾スミヨウに向かってコンドミニウムには大きな窓がはめこまれている。それが強い南風を受けて音をたてていた。ひゆるひゆるというその響きを聞き、私は海に向かって目をこらしていた。

2

「それ、考えすぎです。林さん、日本人に見えない。ケンチャナヨケンチャナヨ」

チェがいつて笑った。半袖のポロシャツを鍛え抜いた筋肉がむっちりと盛りあげている。笑うと、ひどく幼く人なつこい顔になる。韓国人は数えて年齢をいうので、三十一は、満の三十歳だ。

チェよりも二つ上のホは笑わなかった。長袖のシャツを紺のストラックスの上に着ている。全身に刺青が入っているせいで、真夏でも長袖を着ている。彼にスミを入れたのは、日本人の彫り師で、釜山と大阪の二カ所いすみに店をもっているそうだ。

「あのコンドに中国人はいません。だからその女は韓国人です。でも林さんのことなぜ日本人と思つたかはわかりません。警察ではないです。警察が調べたら、すぐ派ハに知らせますから」

ホはほっそりとした優男やさおとこで、切れ長の目をしている。全体に華奢きゃしゃな印象があるが、目つきは冷たい。女にはもてるだろう。いざというとき、相手にためらわずとどめを刺せるのは、ホのようなタイプの男だ。ただ上に恵まれないと、こういう男は出世が止まる。

同じ東洋人、ことに韓国人に対しては、あるていど自分の目を私は信じられた。もって生まれ
たものなのか、それとも地獄島で何千という男を相手にした結果か、私は男の本性を、外見であ
るていど見抜くことができる。寝ればその確率はさらに高まる。東京ではそれをコンサルタント
業にいかしていた。

私たち三人は濃い色ガラスをはめこんだロシア人向けカフェの奥の席にいた。客はほとんどお
らず、入口に近いバーカウンタ―に、ロシア人の女三人が所在なげにすわってお喋りをしている。
そのかたわらのボックスで、ロシア人の男二人が携帯電話をいじっていた。

かつては米兵向けの飲み屋街だった「テキサスストリート」は、上海路と交差する形で南北に
のびている。ハンデルとキリル文字の看板が石畳の路地の両側に並んだ、横須賀の「ドブ板通
り」に似た道だ。

カフェのメニューは英語とハンデルで書かれていて、ロシア語版は別のようだ。カウンターに
いる女たちはウエイトレスで、客の相手もする。年齢は四十前後で、かなり低レベルだが、白人
女を好む韓国人にはそれでも商売になるようだ。

安もののイクラとキヤビアを使った前菜とキノコのホワイトソース煮がテーブルには並んでい
る。私とホはビールを飲んでいるが、運転手役のチェは飲まない。カタギであるなしを問わず、
飲酒運転の取締は厳しい。

この店には個室などなく、またその必要もない、とホはいった。

「日本語、誰もわかりません。韓国人も、夜遅いときしかきません」

店の中央にはカラオケの機械がおかれている。韓国では、飲み屋ではカラオケがないと商売に
ならないらしい。

「菅原さんから連絡ありました。明日の夕方、くるそうです。会長と朴社長と、明日、会いま
す」

「菅原さんど？」

「はい。ビジネスの話です。林さんにも会いたい、そうです」

私は息を吸いこんだ。菅原が動けるといことは、警察の追及が一段落したのを意味している。

「明日、三時に迎えにいきます」

チェがぶあつい掌で唇をぬぐい、いった。体格通りの大食漢で、焼肉なら十人前は軽いと豪語
している。

「三時にどこ？」

チェは首をふった。

「まだわかりません」

用心している。朴はカタギのビジネスマンということになっている。それが日本人やくざの菅
原や地元の派の会長と会うとなれば、それなりに用心するのは当然かもしれない。

おそらくは高級ホテル内の「ルーム」だろう。菅原にとつてはホテル内の移動だけですむし、
韓国側にも「接待」がしやすい。韓国における接待は、本能につながるすべての欲望をとことん
満たしてやる、という姿勢が前提にある。断わったり遠慮することは、接待側の顔を潰す危険が
ある。

私が同時に全員と会うことはないだろう。まず朴と会い、菅原に対して、朴と同じ側に立つよ
う調整を呼びかけられる。それがうまくいかなければ、菅原と会う場には呼ばれない。

菅原が私を日本に戻したがつていとは思えなかった。菅原にとって、私はまだ危険な存在だ。

一方で朴は、自分の側の人間として私を島に送りこめば、あるていどのコントロールが可能になると考えている。だからここまで私の面倒をみているのだ。

菅原が警察の捜査状況について真実を私に告げる可能性は低い。菅原にしてみればなるべく長期間、できれば永遠に、私をこの国にとどめておきたい。

地獄島での殺人、爆破事件の捜査状況を知る手段が私にもないわけではない。しかし今はまだ、すべての音信を途絶しているほうが安全だった。

一本会いちもくかいに連なる関東の大手組織と、それらとも重なる七大組織が、九凱神社の消滅をどう受けとめているかがわからない。警察は、私の運転手だった木崎をまだ監視下においている。星川だけが私にとって信用できる目と鼻だが、彼とも福岡から釜山に渡った直後、離ればなれになっていた。

星川のことだから、つかまつたり殺されたりする心配はない。互いのために居場所を秘密にしておく約束をかわした。たぶん釜山からソウル、ソウルからタイのバンコクへと星川は移動した筈だ。

お互いが日本に戻れば、連絡をとりあう方法はある。

「菅原さんは元氣だった？」

ホは頷うなずいた。

「とても元氣そうでした。林さん、どうしてる？ と私に訊きました」

「太っちゃって会うのが恥ずかしいわ」

私は笑ってみせた。チェが目を丸くする。

「林さん、太ってません。とてもきれいです」

「ありがとう」

菅原と話せば、虚実混じっているとしても日本の状況があるていどつかめる。ただそうするためには、朴に、私が朴サイドに立つと思わせなければならぬ。

「会長も林さんに会うのを楽しみにしています」

ホがいった。

「一度もお会いしていないから、お世話になっているお礼もいわなきゃ。明日、ちゃんというわ。あなたたちにもすぐよくしてもらっているし」

「本当にそう思ってますか」

チェが嬉しそうに訊ねた。

「もちろん。釜山にきたとき、あたしはひとりぼっちでも寂しかったし、これからどうなるか心配でたまらなかつた。もしかしたらこっそり殺されちゃうのじゃないかって。でもあなたたちが本当によくしてくれたんでほっとしたの」

「太ったのは私たちのせいですか」

ホが、

「かもしれない」

私は答え、三人で笑った。

「本当はチェとふたりで悩みました。日本からお客さんきますが、女の人だけは初めてです。どうしたらよいかわかりませんでした。女の人が好きなのはショッピングです。二人で女の人がいきそうなお店、調べたりしました。でも林さん、あまりでかけません。でかけるのは食事だけ。本当に満足して下さっているかどうか、私たちも心配でした」

「大丈夫。会長にもいうわ。あなたたちがとても親切にしてくれた、と」
二人は安心したようだ。目を合わせ、ほっとしたような笑顔になった。

「ねえ、会長ってどんな人？」

「とても立派な人です。私は尊敬しています」

チエが頬を紅潮させ、いった。

「名前は？」

「クオンです」

「クオン会長。お年はいくつくらい」

「五十三です」

朴とかわらない。

「朴社長と同じ年くらいね」

「そうです。二人は中学、高校の友人です」

チエが答えた。ホが目配せした。あまり喋るな、という意味らしい。

「二人とも釜山の出身なの」

「はい。林さんは日本のどこですか」

話題をかえようと、ホが訊ねた。

「東京よ」

私は嘘をついた。

「東京ですか。二度いききましたが、人が多くて目が回りました」

「大久保はいった？」

ホはくすくす笑った。

「いきました、仕事で。ビデオテープや写真をたくさんもっていきました」

「ビデオテープや写真？ ポルノ？」

「まさか。ポルノは韓国より日本のがすごいです。私がついていったのは、韓国のテレビドラマのビデオテープや俳優の写真です。雑誌のコピーでも、日本ではとても売れます。大久保のショップに日本の女の人がたくさん買いにきます。俳優の顔を印刷したライターやカップ、たくさん売るのでびっくりしました」

海賊版だろう。釜山から日本は近いので、船で運び、それを東京に持ちこんだようだ。

韓流ブームのとき、大久保はファンにとって「最も近い韓国」だった。

「儲かった？」

ホは笑顔を見せた。

「ライターもカップも韓国で作ればとても安いです。日本では五十倍くらいの値段で売れます。でも今はもう駄目です。ライバルがいっぱいできて、ビジネスになりません」

「それはクオン会長のアイデアだったの？」

「クオン会長と親しい、在日のビジネススマンです。大久保で韓国料理店をやっています」

彼ら韓国やくざは「ビジネススマン」という言葉が好きだ。女やギャングル以外のシノギはすべて、彼らにかかればビジネスで、そうしたシノギに強い者は尊敬の対象になる。「ビジネススマン」として成功しているかどうかは、乗っている車で証明される。メルセデス・ベンツに乗るのが、何よりのステイタスだ。関税率を考えれば当然で、ベンツ一台で国産乗用車が十台は買える。

韓国ではコピービジネスが今も盛んだ。時計やバッグなどのブランド商品のコピーが、国内工

場で生産されている。中国にも同様の工場は多いが、韓国製品のほうが優秀だ、と奇妙な誇りをこめて、彼らはいう。ただし人件費の差から、安い中国製品に近頃は押され気味らしい。

「日本はいいです。大きな街がたくさんある。福岡、大阪、名古屋、東京。ビジネスチャンスがいっぱいあります。韓国は、釜山とソウルだけです。クオン会長、よく嘆いています」

韓国の人口は約五千万人だが、その二割一千万人が、首都ソウルに集中している。第二の都市といってもソウルとのひらきは大きい。人口が多ければ多いほど、シノギは巨額になるわけで、「新世紀」と朴が日本の地獄島に「ビジネスチャンス」を求めるのは、釜山の限界を見ているからだろう。

『新世紀』はソウルに進出しないの？」

「それは難しいです。ソウルにはソウルの派（バ）がいますから、私たちがいけば戦争になります」

ホが答えると、チェが、

「サシミ、サシミ」

とって笑った。

サシミとは、日本でいう柳刃包丁のことだ。出入りのとき、現場で一番よく使われる得物らしい。

銃は、以前は米軍がらみが多かったが、最近是中国製も増えているという。しかし出入りではまだ銃よりも刃物のほうが幅をきかせている。

私は店の外を指さした。

「このあたりは中国人も多いけれど、中国マフィアは入ってきていないの」

「少しいます。でも大きい顔はさせません。あいつらはエクスタシーをもちこんで、ガンペに売

らせています」

ホが顔をしかめた。

「MDMAね。成分は覚せい剤といっしょだわ」

「覚せい剤？」

訊き返したチェに、

「ヒロポン」

とホが説明した。この国では、今でも覚せい剤をヒロポンと呼んでいる。ヒロポンは、もともと日本の薬局で売られていた、規制前の覚せい剤の商品名だ。

ああ、とチェは頷いた。

「ヒロポンは北から入ってきます。エクスタシーは中国から」

「中国人の女はどう？」

私は訊ねた。昼間の女がまだ気になっていた。

「女？　あまりいません。中国女は韓国では人気ないです。ロシア女のほうが人気あります」

価格差がさほどないからだろう。釜山では玩月洞（ワンルドド）にいけば、韓国人の安い娼婦がいる。

「白人がいい、ということね」

確かに需要がなければ、入ってはこない。日本に中国人の女が大量に流入してくるのは、マツサージや売春、それ以外にも「安い労働力」としての需要があるからだ。

むろんカタギで入ってきている中国人の女はいるだろうが、この二人にそれを訊ねても情報を得られそうにない。

食事を終えた私たちは、少しテキサスストリートをぶらついた。温泉マークを掲げた安ホテル

やドルや円、元をウォンに両替する「換銭」の看板をだした店、安物の洋服屋、カラオケクラブなどが建ち並んでいる。ハンブルとキリル文字、漢字の看板が混在した一角だが、剣呑さは感じられない。両替商では、公衆電話の国際通話用のテレホンカードも売っている。

「上海路は昔から釜山にいた中国人の街でした。それが今、大陸からたくさんくるようになって、ロシア人も増えています。ロシア人は、女が多いです。中国人はこういうところに住んでいる」歩きながらホが温泉マークを指さした。俗に「逆さクラゲ」といわれているデザインだ。

華僑と大陸からの流入者が混在しているという点では、日本の中華街とも似ている。が、横浜の中華街ほどのエキゾチシズムはない。

「中国人が少ないのは、釜山はあまり儲からないからです。釜山にくるくらいなら、日本にいきます」

止めておいたメルセデスの前までくると、後部ドアを開けながら、ホがいった。

「帰りましょう。今日は道がいつもより混んでいます」

海雲台まで釜山中心部から地下鉄なら三十分強、車だと一時間近くかかる。交通渋滞を計算しての移動が、彼ら韓国人は日本人以上に染みついているのだ。

翌日、私を迎えに現われたのはホひとりだった。珍しくジャケットを着ている。コンドミニウムから五分と離れていないホテルに私は連れていかれた。

地下のワンフロアを占めている「ルームサロン」に朴とクオン会長が待っている、とホは告げた。

「ルームサロン」は、日本にはない営業形態の風俗店だ。形としては高級個室カラオケボックス

で、食事と酒、ホステスがつく。ホステスの中には「連れだし」可能な者もいて、別料金で体を売る。

私が案内されたのは、大理石をしきつめた四十畳ほどの広さがある部屋だった。中央にこれも大理石のテーブルがあり、囲むように革ばりのソファが並んでいる。壁にはキルトのタペストリーがかけられていた。

「ママ」と呼ばれている、三十代後半の美人が私たちを案内した。おそろしくこの「ルームサロン」は「新世紀」の管理下であり、「ママ」はクオン会長の愛人だろう。

ソファには、スーツ姿の朴と小柄で頭の薄くなった男がかけていた。内臓がどこか悪いのか、ひどく顔色が黒い。目を細めているが、笑っているようには見えない。ただじっと私を観察している。

ホステスはいなかった。「ママ」も、私とホを部屋に送り届けるとすぐに姿を消した。防音材の詰めこまれたぶあつい扉が閉まり、ホは直立不動でそれを背にした。

「水原さん、久しぶりです。お元気そうだ。あいかわらず、おきれいですね」

朴が立ちあがり、にこやかにいった。もうひとりとは正反対で、ころころと丸っこい体つきをしている。釜山は本拠地だが、福岡でソープランドやデリヘルを手広く経営している。

朴を仲立ちに、釜山の「新世紀」と福岡の要道会が手を結んでいるのだ。

「太っちゃったんです。あまり薬をさせていただったので」

「女の人はふくよかがいい。男を安心させるのは、むちむちした女の肌ですよ」

朴はいつて、すわっている男を示した。

「彼は私の友人でクオン。水原さんのお世話を焼かせていただいているのは、彼のところの若い

社員です」

「アンニョンハセヨ」

私はいつて手をさしだした。クォンは固く筋ばった手をしていたが、力をこめなかった。自分以外の人間は信用しないタイプの男だ。

「水原です。こちらでは林といいます。ホさんとチェさんにはたいへんお世話になりました。二人ともクォン会長をとても尊敬しているというので、お会いするのを楽しみにしていました」

朴の通訳を聞く前に、クォンの唇がわずかだがゆるんだ。日本語をあるていど解せるようだ。

「ホ」

全員が腰をおろすとクォンが合図をした。テーブルにはビールやスコッチ、コーラなどが並んでいる。

ホはまずビールを三人のグラスに注いで回った。自分の分はない。

乾杯した。朴がにこにここと笑いながら口火を切った。

「水原さん、釜山にこられてどのくらいたちました？」

「もうひと月です。いつまでもお世話になるわけにはいかないし、といってこちらでわたしにできることもないし。そのあたりのことをご相談しようと思っていました」

朴は手をふった。

「水原さんさえよければ、半年でも一年でも、あのコンドを使って下さい」

「わたしも仕事をしないと。日本の預金にはまだ手をつけられないし」

日本をでるとき、当座の費用として五百万をもってきた。洋服や身の周りのものを揃えるのに使った以外は残っている。だからといって安心できる額では決してない。

「仕事ですか。この韓国で？」

私は首をふった。

「言葉を喋れないわたしができるとしたら日本人相手のビジネスです。今はそれはちよつと」

「じゃあ日本で？」

「状況が許せば」

「今夜、菅原さんがきます。菅原さんと相談しましょう」

「菅原さんは何というかしら。わたしのことをまだ日本の警察は捜しているでしょうし」

「そう、そうですね。でもあの島だったら、水原さんがいても安全だと思いませんか」

「確かに警察署はないけれど、あんな事件のあったあとだから、うるさいのじゃないかしら」

「それは大丈夫です。一週聞くらい、テレビや雑誌の人、きていましたが、今は静かだそうですね。

中国人もいなくなつたらうれしいです」

「お店はどうなりました？」

「袖屋さん、潰れました。菅原さんが買いつつたそうですね」

潰れるのは当然だ。島主と名主が袖屋に集まって会合をしている最中に、爆破されたのだ。爆弾をしかけたのは、朴が連れていた金オカネという男だ。

「そういえば金さんは元気ですか」

無口な金は破壊工作のプロだった。「新世紀」の組員だろうと思ひ、ホやチェに訊いたが、二人ともそんな男は知らない、と首をふった。

「私も会っていません」

「てつきりクォンさんのところの人かと思つてました」

「あの男はちがいます。フリーです。紹介をうけて雇いました」
誰の紹介かはいわなかった。

菅原だろうか。爆発のあと、菅原は島に残り、「あと片づけをする」といった。予定では、中国人どうしの内輪もめという形で警察に納得させる筈だった。だが、警察は私を捜している。

「金さんは要道会の人のですか。もしそうなら、菅原さんはわたしが日本に帰ってきたら困るでしょう」

朴は首をふった。

「彼はちがいます。要道会とはまるで関係はありません」

「すると朴さんも会うことはない？」

「たぶん二度と会いません。ですから水原さんが日本に帰っても菅原さんは困らない」

「菅原さんは、事件を中国人どうしの内輪もめにする、とあのときいいました。でも警察はわたしを捜しています。容疑者だと考えているようです」

「最近はちがいます。水原さんが事件について情報をもっていると考えてはいますが、犯人だとは思っていません」

「なぜわかるのです」

「お巡りさんの友だち、私もいますから。あの島のこと、テレビや雑誌が取材にきて、一番困ったの警察です。今まで何十年、もしかしたら百年くらい、知っていて知らないふりをしてきました。それをいわれると、警察は苦しいですね」

その通りだ。私が島にいた頃は毎年正月の、所轄署の道場びらきには、羽織屋、袖屋、袴屋など主だった店の売れっ子が振り袖を着て、酒とお節料理の詰まった重箱を届けるのが習わしだった。

た。

警察は島の存在を見て見ぬふりをしていた。ひとつには島主である間垣家^{まがき}が、県下でも有数の名家だからだ。

袖屋の爆発で島主は死んでいる。慣例にしたがうなら、新たな島主が間垣家本家から派遣される筈だ。

間垣家の本家は大地主で、病院や不動産の経営を熊本で手広くやっている。分家筆頭が、島にあった九凱神社の神主として地獄島を治めるのがしきたりだ。

「神社はどうなりました」

「燃えてしまってそのままです。ミスタマガキも亡くなりましたし。でもマスコミもさすがに九凱神社のことまではニュースにしませんでした。警察の中には、犯人はミスタマガキに恨みをもった人間だという人もいます。ミスタマガキと袖屋さんは中国人と組んでビジネスをしていました。それが理由ではないかと」

警察がそういう考え方に傾けば、私は犯人像から遠くなる。

「菅原さんはそちらの方向にもつていく、とあのときいっていました」

「はい、私もそう聞きました。けれども、東京でのことが問題になったようです」

「東京でのこと？」

「島の番人が、水原さんの事務所で殺された事件です。警察は死んだ男が島の番人だったことをつきとめました。殺したのは一木会だと思っっているようですが、島と水原さんにどんな関係があるのかを知りたがっています」

私は息を吐いた。私の事務所で死んだのは番人だけではない。一木会のやくざも殺されている。

番人は一木会の世話人を拷問して殺した。私の居場所をつきとめるためだ。それを知らない一木会は私を疑い、調査にきたやくざが番人の襲撃のどばつちりをうけた。

「わたしがでていって全部を話せば、警察は納得するでしょうけれど、一木会も要道会も困るところになる」

朴は首をふった。

「それはまずいです。要道会は、一木会とはこれまで何のかかわりもなかった。九州と関東で縄張りもちがう。水原さんがでていけば、島を通じて全部がつかつてしまう」

「全部をつないでいるのは、わたしではなくて朴さんよ。あなたは本当に顔が広い」

「たまたまですよ。ビジネスのおかげで、いろいろな人と知り合う機会がありました」

朴はいつて肩をすくめた。

「水原さんは日本に帰りたい。でも今は条件が整っていない。それを何とかできないか、菅原さんにかけあってみましょう」

「そうしてもらえれば助かります」

妙だった。朴の話のおさめかたは、これ以上この問題についてここで話しあうのを嫌がっているように見える。

それはもちろん私に対してではない。クオンに対してだ。

「菅原さんは、今夜九時にこのホテルにきます。いっしょに待ちますか」

朴は訊ねた。私は微笑み、首をふった。

「わたしがここにいたら、皆さんが楽しめます。一度、部屋に戻ってでなおすことにします」

「わかりました」

クオンがホに合図をした。

「お送りします」

ホが進みでた。

「ルーム」をでてメルセデスに乗りこむと、私はホにいった。

「ごめんなさい、わたしのせいで楽しめなくなっちゃったわね」

「いいんです。会長や朴社長といっしょでは、私も緊張しますから」

「朴さんて不思議な人ね」

「私はよく知りません。お金持でいろんな人ときあいがある、ということしか」

「朴さんのビジネスには、『新世紀』も参加しているのですよ」

「私が聞いた話では、このビジネスが始まったら、女性を集めて日本に送るのが、派の仕事になるだろう、と」

確かにそれは大きなシノギになる。

売春ビジネスにおいて一番重要なのは、商品である女の確保だ。かつてのように借金やしきたり、で女を縛りつけられた時代とちがい、新たに地獄島を「売春島」として機能させるには、新鮮な女の供給が絶対条件となる。

中国人の場合は、蛇頭の監視があったので、女たちが島から逃げだす心配はなかったろう。日本に渡航、入国するための諸費用を蛇頭に借金した者は、逃げれば故郷の家族に累が及ぶことになる。蛇頭は地域の役人、警察ともつながっているの、親や兄弟姉妹を人質にとられているも同然だからだ。

一方、韓国人の女はそうはいかない。借金のカタに売られる女もいなくはないだろうが、大半

は、本人が稼ぐのが目的で日本の地獄島へ渡航する。そこでの待遇や仕事の内容に不満を抱けば、他の場所へ移動したり帰国するのを止めることはできない。

脅迫や折檻をすれば、警察に駆けこんだり、電話で本国に救援を求めることも考えられる。したがって、連れていった女全員を島に定着させるのは不可能だ。結果、全体の二割から三割は、常に流動的な存在となる。すなわち、女の供給は絶えずつづけなければならぬ。

これは島にとっても必要である。客は「新人」を求める傾向が強いからだ。いついつても同じ顔ぶれしか揃っていないとなれば、客の興味が失われるのは、娼館も飲み屋もかわりがない。

地獄島での売春ビジネスが軌道に乗れば、「新世紀」は女を集め日本に送りこむという役割を担う。日本での窓口が要道会だ。

朴は娼館そのものを陰で経営する。朴が「新世紀」と要道会をつないだのは、そうした狙いがあつたからだ。

その結果、島が完全に乗っ取られたとなると、間垣家はどうか。

地獄島が日本人の娼婦だけではもはや立ちいかないと、死んだ島主はわかつていた。そこで中国人と組み、女の供給を委ねた。だが島主は殺され、警察の介入によって中国人も一掃された。新たに入ってきたのは韓国人と福岡のやくざで、彼らが間垣家に対してどう折り合いをつけるのか、私には予想がつかない。

菅原にはたぶん何か考えがあるのだろう。間垣家の存在を無視して、島で売春ビジネスを進めれば、ほぼ確実に警察の標的にされる。また九凱神社という「聖域」が失われたことで、他の組織暴力からも利権の島として目をつけられることになるだろう。

要道会は七大組織に数えられるほどの大組織ではなく、その勢力範囲は北九州に限定される。

連合などの大組織が、地獄島のうまみに目をつけ、手をつつこんでくるような事態になったら、どうして太刀打ちはできない。

あるいは朴は、いずれは要道会から別の大組織に寝返る腹つもりなのではないだろうか。それがあるから、要道会と一木会の問題を話しあうのを嫌がったのかもしれない。

安全が確認され、島に私が渡って彼らのビジネスを手伝うことになったとしよう。万一、朴が要道会を裏切れば、まっ先に消されるのは私だ。要道会にとつて、私は朴側の人間だからだ。

そして朴側は、私を殺されたことを理由に、新たに組んだ大組織を島に送りこめる。

やはり、あの島に戻るのには考えられない。

私は息を吐いた。

「どうしました、悲しそうですよ」

ホがいった。

「自分がどうすればいいか、わからないの」

珍しく、私は本音を告げた。

「林さんは日本に帰りたくないのですか」

「帰りたいけれど、今のままではきつとすぐに困ったことになるような気がするの」

「では時間がたてばよくなるのですか」

「そうね。なるかもしれないし、かわらないかもしれない。今はまだ判断がつかないわ」

「だったらもう少し釜山にいたいんです。クオン会長もビジネスの話、まだ急いでいません。

私とチェは、林さんのお世話をするのが楽しいです。チェは、林さんと話すと、自分が賢くなつたような気がする、といいます。私も同じです」

「ありがとう。覚えておくわ」

メルセデスはコンドミニアムの前に着いた。

「あとで電話して迎えにきます。夕食はどうしますか」

「今日はいいわ。あまり食欲がないの」

私はいった。

階段を登り、ガラス扉をくぐった。がらんとしたロビーを横ぎって、エレベータのボタンを押す。

二十五階でエレベータを降り、広い廊下を歩いた。

部屋の扉が見えるところまできて、私は立ち止まった。

きのう会った女が扉の前に立っていた。きのうと同じ服装で、サングラスの奥からこちらをじつと見つめている。

私は鍵をとりだすと、女に歩みよった。女が口を開いた。日本語でいった。

「あなた日本人ですね」

無視して鍵穴に鍵をさしこみ、ロックを解いた。

「わたし、人を捜しています。その人、ここにいました」

女を見た。女がサングラスを外した。険しい目をしている。それがなければ、美人の部類に入るだろう。まちがいないのは、娼婦やそれに近い仕事をしている女ではないということだ。

「今はあたし以外に誰も住んでいない」

私はいった。女は動じなかった。手にしていた写真を私につきつけた。

「この人です。知りませんか」

白っぽい光の中で、雑踏を歩く男の横顔が写っていた。

「知らないわ」

私はいった。金だった。

「嘘です」

女はいった。私は女を正面から見すえた。

「警察を呼ぶわよ」

「どうぞ。警察がきて困るの、あなたです」

「どうして？」

私は携帯電話をとりだし、いった。

「このコンドのオーナーは、あなたではありません。あなたは借りているだけ。警察がくれば、オーナーが怒ります」

「試してみる？」

私は携帯電話をかざした。

「部屋の中を見せて下さい。誰もいなければ、わたしは帰ります」

「あなた、何者？ その人の奥さん？」

女は首をふった。

「ちがいます。とても知りたいことがあって捜しています」

私は息を吐いた。警官ではなさそうだ。金の恋人なのだろうか。あるいは姉か。金よりは少し年上に見える。

「どうぞ」

私はドアノブを引いた。

「気のすむまで部屋を見なさい」

女は私の目をのぞきこんだ。

「ありがとう」

私より先に入った。まず玄関で立ち止まり、室内を見回す。

「あなた、きのうもいたわね」

立っている女に私は問いかけた。女は玄関のクローゼットを開け、中をのぞきこんでいる。

「はい」

答えて女は動いた。リビングに入り、テーブルの上をチェックすると、今度は寢室のドアを開ける。

「きのうもその写真の人を捜していたの」

「は、」

寢室のクローゼットの扉を開閉する音がした。私がここに連れてこられたとき、一切の私物はなかった。キッチンに食器はそろっていたが使われた形跡はまるでなかった。

寢室をでてくると私に訊ねた。

「バスルームどこですか」

私は無言で指さした。女は入った。トイレを使いたかったのではなく、洗面台のチェックが目的だった。徹底している。ひきだしを開け閉めする音が聞こえた。

やがて現われた。ひどく落胆した表情を浮かべていた。

「気がすんだ？」

女は無言で私を見やった。怒りを感じさせる目だった。

私は興味を惹かれていた。女の目的が私でないことは明らかだ。私であるなら、わざわざ金の写真など用意はしない。

大きな息を吐き、女はリビングのソファに腰を落とした。吸い殻の入った灰皿を横目で見ると、バッグから一本の煙草を抜きだした。

図々しい、と責めるよりも興味のほうが上回った。この女が金と何かトラブルを抱えているなら、ただ追いだすよりその中身について知っておいたほうがいい。

「何か飲む？」

立ったまま、女に語りかけた。女は濃い煙を吐くと、

「いらぬです」

と答えた。

私はキッチンにいき、インスタントコーヒーをふたつのカップに作った。リビングに戻り、ひとつを女にさしだす。

女は煙草を吸った手を額にあて、床をじっと見つめていた。半ば放心したような表情で、横顔に疲れがにじんでいる。

我にかえったように顔をあげ、カップと私を見た。

首をふる。

「いらぬといいました」

私はカップをテーブルにおき、向かいのソファに腰かけた。煙草をバッグからとりだしてくわえたとき、女の目が鋭くなった。灰皿にあった吸い殻と同じ銘柄かどうかを比べているようだ。

「名前、何ていうの」

女の視線に気づかないふりをして、私は訊ねた。

「パイ・リー」

「パイ・リー？」

女は小さく頷いた。リーは李なのだろうか。そうなら、リー・パイという筈だが。

「あなたの名前は何ですか」

「林。林英美」

「ハヤシ、エミ？」

「そうよ」

私は答えて、コーヒーをすすった。女は、「ハヤシ・エミ」と口の中でつぶやいた。

「ねえ、ひとつ訊きたいのだけれど」

女は無言で私を見た。

「なぜあたしが日本人だとわかったの？　きのう、下で」

女は首を傾げた。

「なぜ？」

「いきなり日本語でごめんなさい、といったじゃない。ふつうは韓国人だと思っわ」

女はほっと息を吐いた。表情がゆるみ、そのぶん人を見下したような目つきになった。

「あなた、わたしをよけたね」

「よけた？」

「道で、すれちがうとき。日本人よける。韓国人、よけない。日本人、人とさわるの嫌がる

から」

思いだした。下の敷石が工事中だったせいで、歩道が狭められていた。それですれちがうとき、体を斜めにした。そのことを女はいっているのだ。

「それじゃなければ日本人だとわからなかった？」

女は笑った。鼻先で嗤うような笑みで、私はむっとした。

「なぜ、そんなこと気にする。あなた韓国人に思われたかったのか。濃い化粧して、サンバイザーかぶって、韓国人のふりしてたか」

私は言葉に詰まった。女という通りだ。女は肩をそびやかし、私を見つめた。

「このコンドミニアムのオーナーは、パク・ロジュン。パクは、釜山と日本でイリーガルビジネスをやっている。あなた、パクの愛人か？　パクは一カ月前、日本にいった。あなたそれで、パクときたか」

「あなたに關係ない」

「この写真、もう一度見なさい！」

不意に女は声を荒らげた。金の写真をとりだし、私につきつけた。

「本当にこの男、知らないか。パクは、一カ月前、この男と日本にいった」

「それがどうしたの。知らないといったでしょう」

女の目が冷ややかになった。

「あなた、パクに利用されているだけ。それがわからない、バカね」

私は息を吸いこんだ。私をもっと怒らせることもできただろうに、罵った時点でこの女の負けだ。

「何をそんなにかつかしているの。その男があなたに何をしたの」
女は立ちあがった。

「あなたに関係ない。わたしはあなたを助けようと思った。でもバカは助からない」
「確かにその男を見たことはある。日本からこっちにくる飛行機の中で。でも釜山空港で別れたきり、会ってないわ」

女はさっと私を見た。

「それ、本当か」

「ええ。その男がこのコンドにいたというのは、いつの話？」

「パクが日本に行く前。パクはこの男にここを貸した。一週間、住んでいた。だから日本から帰ってくる時、またこの部屋にいたと思った」

私は首をふった。

「あたしがこの部屋にきたときは、何もなかった。その男が住んでいたとわかるものは何ひとつ」

女は私を見つめていた。

「あなた、パクに会うか」

「そうね。会うこともあるかもしれない」

女から話をひきだそうと、私は気をもたせるいいかたをした。

「この男がどこにいるか、パクに訊けるか」

「訊くくらいはできるかもしれないけれど、なぜ？」

「なぜ、とは？」

「なぜあたしがあなたにそこまでしてあげなければならぬの？ あなたはその男を捜す理由をあたしが訊ねたら、関係ないといったわよね。関係ないのなら、あたしがあなたのために訊いてあげる義理もない」

「ギリ？」

「理由よ。なぜあたしがあなたのためにそこまでしてあげなけりゃいけないか、という理由」

女の目が私をそれた。私はつつけた。

「あなたはあたしを助けようと思った、といったわね。何から助けてくれるの」

女は新たな煙草を抜いた。そのときちらりとパッケージがバッグからのぞいた。「中南海」だった。

火をつけ、荒々しく煙を吹きあげた。すれっからしのような仕草だが、商売女とはちがう。なぜなら商売女は、よほど愚かでない限り、人を見下したような目つきをしない。この女が愚かな商売女なら、外見ですぐわかる筈だ。爪は短く、化粧が薄い。安香水の匂いもしない。

この女は、自分より愚かな人間をたっぷり見ている。だからああいう目つきを反射的にしてしまふのだ。つまり愚かではない。だがいきなりここに押しかけてくる行動はどうい賢いとはいえない。よほど切羽詰まっているのだろう。にもかかわらず、私と情報の駆け引きをしようとしている。

やがて女は私に目を戻した。

「あなた、パクの愛人ではないのか」

「ちがうといったら信じる？」

「わたしこの部屋見た。愛人なら、ドレスたくさんある筈。釜山にはデューティフリーショップ

あるね。バッグ、ウォッチ、パクに買ってもらえる。でもこの部屋には何も無い。ヴィトン、シヤネル、カルティエ、ひとつもないよ。たぶん、愛人ではない」

「ええ、ちがうわ」

「じゃあ何か。友だち？」

「パクさんとあたしは、共通の友だちがいる」

「あなた観光旅行で釜山にきたか。ちがうね、ショッピングいかない、カジノにもいかない。あなたがしているの、毎日、歩くだけ」

「あたしを見張っていたのね」

「あなたを見張ったのじゃない。この部屋を見張っていた。あなた、夜になると、ベントにのつた男と食事に行く。その男、金持か、ちがう。釜山のクライムシンジケートのメンバーね。知っていたか」

「『新世紀』のこと？」

女は頷いた。

「『新世紀』のボス、パクと仲がいい。つまりあなたは、『新世紀』のゲスト」

「それで？」

「『新世紀』は、日本のヤクザとも仲がいい。あなた日本のヤクザの愛人か。そうなら、あなた日本に帰りなさい」

「なぜ？」

女は表情をひきしめた。無言で首をふる。

「はつきりいなさいよ」

私はいった。

「あたしは、パクのおかげでここにいられるし、『新世紀』のメンバーに世話を焼いてもらってもある。そのことの何が気に入らないの」

「——パクは殺される」

女がいったので、私ははっとした。

「誰に？ 『新世紀』に？」

「ちがう。もっと大きなシンジケートをパクは裏切った。だから殺される」

「何の話をしているの」

「あなたにいつもわからないね。だけどパクは殺される。いっしょにいたらあなたも危い」

「待ってよ、もっと大きなシンジケートってどこの？ 韓国の別の派のことを知っているの」

「派？」

女が首を傾げた。

「ああ、クライムシンジケートのことね」

「あなた、韓国人じゃないわね」

女は答えなかった。

「中国人なの？ 答えなさいよ」

「あなた今度いつ、パクと会うか。この男のことを訊いたら、全部話す」
金の写真をかざしていった。私は息を吸いこんだ。

「その男の名前は何ていうの」

「キン。キン・ルイ」

「キンが今どこにいるかを訊けばいいのね」

「いつ、パクと会う」

私は女を見すえた。

「今夜よ」

女はわずかに息を呑んだ。

「どこで会う」

「たぶんこの近くね。日本から知り合いがきて、いつしよに食事をする事になっている。中国でもビジネスをやっている人よ」

女は反応した。

「何という人か」

「嘘よ。中国とは関係ない。あなたが中国人かどうかを確かめるためにいったの。中国人なのね」

女はくやしそうに私をにらんだ。

「パイ・リーというのは本名なの？」

バッグから小さなノートをとりだした。ボールペンで書きつけ、一枚破って私にさしだす。そこには、

「白理」

「金鋭」

とあった。

「パイ・リーとキン・ルイ」

女は説明した。私はふと気になって訊ねた。

「金も中国人？」

白理は頷いた。

「朝鮮族」

朝鮮民族系の中国人という意味のようだ。それで私は納得した。朴は、金が「フリー」だといっていた。

韓国やくざの多くは、ホヤチエのように兵役を逃れる。だが金は、爆発物の扱いが得意で、軍隊経験があるように見えた。つまり韓国人ではなく、中国人の「殺し屋」だったのだ。朴はそれを初めから知っていて、金を雇い、日本に連れていった。地獄島の島主や袖屋の名主を金に殺させるためだ。韓国人の殺し屋を使ったのでは、「新世紀」などとの交友関係でアシがつく危険があると考えたのだろう。

「金は中国のどこからきたの？」

「上海。吉林省で生まれて、上海に流れてきた。上海で——」

いいかけ、白理は口をつぐんだ。

白理の顔がこわばった。こみあげた感情をおさえこもうとしているようだ。

「とにかく——」

白理はいった。

「金鋭がどこにいるか、パクに訊きなさい」

「パクを殺そうとしているのは金なの？」

白理の目が鋭くなった。

「なぜそう思うか。あなた金のことを知っているのか」

「ちがうわ。あなたはバクが大きな組織を裏切ったので殺されるといった。あたしが『新世紀』のメンバーから聞いた話では、韓国にそんな大きな犯罪組織はない。だとしたらどこののか。あなたも金も中国人で、中国には大きな犯罪組織がある。一ひく一は零でしょう」

朴が、韓国と中国、ふたつの犯罪組織を天秤てんびんにかけた、という可能性があることに私は気づいた。

地獄島には袖屋と組んだ中国人が進出して、韓国人である朴には単純にそれが邪魔だった、と私は考えていた。だが実は以前から朴が中国人とコンタクトをとっていたとしたらどうだろう。

地獄島に韓国人の女も送りこむことで、中国人のビジネスに割って入ろうとした。ところが調整がつかず、中国人をすべて排除する方針に転換したのだとしたら。

地獄島の中国人に、それらしい大物はいなかった。いたのは、用心棒と女の情夫を兼ねるような小物ばかりだ。そこで朴は金を使って、島主と袖屋の名主を殺し、警察を呼びこむことで中国人を排除した。

それはほぼ成功したかのように見える。が、地獄島の中国人たちの背後に大物がいて、それに腹を立てたとしたら、朴が狙われる理由になる。

「あなた、警官か」

白理がいったので、私は噴きだした。

「わたしが警官？ 馬鹿いわないで。そういうあなたこそ、なぜ金を捜しているの」

白理が中国人であるのはわかった。中国の警官だろうか。

だが、社会主義国家の警官が、単独で国外で捜査にあたるとは思えない。いや、どの国の警官

でも、たったひとり国外では捜査にはあたらない。

白理は答えなかった。私は質問をかえた。

「あなた、旅行者？ それとも韓国に住んでいるの？」

「わたしは明日、中国帰る」

白理はいった。

「つまり旅行者ね。金を追いかけてわざわざ、中国からこの釜山まで来た、ということ？」

白理は不意に立ちあがり、私に歩みよってきた。触れあうくらいに顔を近づけ、私の目をのぞきこんだ。

「日本人は忘れっぽいね。だから信用できない」

「何をいっているの」

「わたし、日本留学、二年いた。いろんな日本人見たよ。いい人も悪い人も。同じは、忘れっぽいこと」

「昔のことにこだわらないといたいわけ」

白理は頷いた。

「日本人はそれを美德だと思っているわ」

「それ、ちがう。愚かよ。忘れてしまうと、まちがいをくり返す。だからわたしは、大事な話をしない」

「じゃあ好きにしてください」

白理は人さし指で私の胸を突いた。

「あなた信用できるか。わたしの話、バクや『新世紀』にしないか」

「何を話すの？ わけのわからない中国人の女がやってきて、金を捜しているというの？ そんな話をしても、何の得にもならない」

私は怒りを抑え、いった。白理は再び私をいらだたせようとしている。

「わたし、あなたをずっと見ていた。韓国人のふりをしている。毎日、ビーチを歩く。食事はしても、男と寝ない。あなたの顔、整形の跡がある。だから、あなたは逃げている。逃げている女は、ふつう、男頼るね。馬鹿な男でも何でもいい。男いれば恐くないから、男とつきあう。あなた、そういう男いるか」

「いないわよ。それがどうしたの」

「あなた、ひとりね。日本はわからないけれど、韓国ではひとり。仲間いない」

「仲間は作らない主義よ」

白理は笑った。嘲けるような笑いだった。

「それ、嘘。日本人、仲間大好き。嫌いな人でも仲間にする。大きい会社入りたがるは、だから」

「あたしはかわっているのよ」

笑みが消えた。

「そう。かわっているか。あなた困ったら中国くるといい」

「なぜ中国なの？ 日本に帰ればすむことだわ」

白理は首をふった。

「あなた日本に帰れないから、釜山にいる。それわかったよ、わたし。釜山いられなくなったら、どこいく？ わたし助けてあげる」

「どうして今日会ったばかりのあなたを頼らなければいけないの？ 馬鹿なこといわないで」

「あなたひとりぼっちだから。仲間いないでしょ。わたしも同じよ」

「これは何なの？ 詐欺？ あたしから金をひっぽろうとしているのなら無駄よ」

白理は首をふった。

「わたしのいったこと、すぐわかるよ。あなた携帯電話あるか」

「あるけど、番号は教えない」

「オーケー。わたしの番号、教える。メモリーしなさい」

白理はいつて、さっきのノートの切れ端に番号を書きつけた。

「これ、必ず捨てなさい。この名前、残したらいけない」

「金に白理を知っているかって訊いちや駄目なのね」

冗談めかした口調で私はいった。白理はにこりともしなかった。

「あなた殺されるよ」

「それはつまり、金があなたを恨んでいるってこと？」

白理は表情をかえずに答えた。

「金の弟、二歳下。六カ月前、わたしが殺した」

「あなたが」

私は白理を見直した。白理は小さく頷いた。

「殺し屋なの？」

「あなたも、と訊きかけ、危く私はとどまった。白理は私の問いを無視した。

「早くメモリーする。わたしの前で」

畏^{おそ}たろうか。私が殺され、携帯電話からこの番号が発見されることで、何かを起こそうとして
いる者たちがいるのか。

「これが本物かどうかを確かめるわ」

私はいつて、自分の携帯電話をとりだした。こちらの番号を非通知にする処理をして、メモに
ある番号を押しした。

白理のシヨルダーバッグの中で着信音が鳴った。私は電話を切った。

「オーケーか」

私は頷いた。白理はライターでノートの前端に火をつけ、灰皿においた。燃え尽きるまで見
つめる。

「あなた、いくつ？」

私は訊ねた。

「三十七」

「あたしとひとつちがいね」

白理はさっと私を見た。

「あたしは三十六よ。じき、七になる」

「あなた若く見える。もつと下、三十くらいと思った。わたしはどうか？」

「どう？ 若く見えるかってこと？」

白理は頷いた。私は白理の顔を間近から見つめた。

「肌はきれいだけれど、皺が深い。年相応つてところね」

シヨックをうけたようすはなかった。

「もつとお婆さんに見えるかと思った」

「そんなことはないわ。どこに住んでいるの？」

一拍おいて、白理は答えた。

「上海」

「いったことないわ」

「あなた韓国いられなくなる。上海くる」

「そしてあなたを頼るわけ？」

白理は私の目を見つめた。

「わたしは、わたしのためにあなたを助ける」

「まだあなたに助けられなければならぬほど困ってない」

「すぐ困るよ」

「パクが殺されるから？ 確かにパクが死ねばあたしも困るけれど、それでも日本に帰るとい
う方法がある」

「あなた日本帰れないから釜山いる。それでも帰るか」

私は気づいた。この女は、私が追われる立場にあることを確認したかったのだ。はつきりとは
認めなかったにせよ、薄々は勘づかれている。

「何か誤解があるようね。別にいつでもあたしは日本に帰れるわ」

私は微笑んで見せた。白理は聞こえなかったようにいった。

「金をもし見かけたら、わたしに電話する」

「殺すの？」

今度は白理が笑みを浮かべた。

「あなた関係ない」

「オーケー」

私は白理の真似をしてやった。

「もう帰って。お互い、これ以上話すことはなさそうだから」

怒るかと思ったが、白理は素直に腰をあげた。

「ハヤシエミ」

「何？」

「それ、本物の名前か」

「本物よ、といいかけ、考えがかわった。

「今はね」

白理は頷いた。

「あなた、わたしが見た通り。仲間のいない、珍しい日本人女。悪いことたくさん知ってる。ホステスだったか」

「ちがうわ。でもそれ以上は教えてあげない。次に会うことがあったら、ね」

これは化かし合いだ。私も白理も、決して人にうちとけられるタイプではない。簡単には嘘をつかないが、相手の知りたいことをすべて教えてやろうとも思わない。互いにうしろ暗い過去があることを確認しあい、だからこそ信用できる面とそうでない面があるのを感じとった。

おそらく金の居どころを知るのが白理の当初の目的だったのだろうが、私から手がかりが得られないと知るや、私そのものに目的を変更したのだ。だがそれが何なのか、今は決して口にしな

いだろう。

この女は、遠からず私が苦境に陥ると確信しており、それを待っているのだ。私に手をさしのべ、そしてそれとひきかえに何かをやらせようとしている。

スパイかもしれない。

「再見」

白理は告げて、部屋をでていった。私は返事をしなかった。

警官でなくスパイなら、単独で行動をとることはあるだろう。金が、中国公安機関が追っているテロリストか何かだという可能性もある。

確か中国では、警察組織は「公安部」、諜報組織は「安全部」と名称が異なっていた筈だ。

だが乏しい知識の中であれこれ想像しても、意味はない。

白理の「予言」が正しければ、近いうちに私は彼女に助けを求めることになる。

もちろんそれも何らかの作戦で、韓国を訪れた裏社会とつながっているようなあらゆる日本人女に、番号を教え、協力者に仕立てるための布石のひとつに過ぎない、という可能性があった。

釜山は、それにはもってこいの街だ。日本に近く、日本人や在日韓国人の犯罪者の出入りが激しい。

ただ、金を知っている者となると、そう多くはない。

金が朴とともにひと月前、釜山から日本を訪れたのを、白理は把握している。その朴との関係から私に接触し、リクルートしようと考えたのだ。

日本に早く戻る方法を考えるべきだった。

中国国家安全部と朝鮮族系テロリストの暗闘にまで巻きこまれたら、たまったものではない。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。